

おのきた

尾北校長室から

第21号



「働かない」働きアリの話 ～ 必要な無駄

新型コロナウイルスの感染が大変な状況になるにつけ、「医療崩壊」という言葉をしばしば聞くようになってきている。こうした事態は想定外のこととはいえ、社会の「日頃からの準備」が不足していたことを私たちに突き付けている。この「日頃からの準備」について、思い起こすことがある。

ある日のこと、庭先で日向ぼっこをしていて、アリが何かを引きずっているのに気が付いた。自分の何倍もあるものを巣まで運ぼうとしていたのだろう。他のアリも寄ってはきたが、手伝うようでもない。むしろ始めの1匹が自分の獲物だと主張しているようにも見えた。最後まで見とどけるほど暇でもなかったので、この顛末は分からないが、アリにも生活があることに思いを寄せるひと時になった。



そういうことがあって、ある本のタイトルに目が止まり、手にした。『働かないアリに意義がある』という、進化生物学者の長谷川英祐氏が著した本である。目に留まったのは、そもそも働かないアリがいるとは思わなかったし、働かないアリにどんな意味があるのか分からなかったからである。

この本によれば、働きアリの7割は、巣の中で休んでいる。また1割は、一生働かないという。この事実には、「反応閾値」という語がキーワードになる。「閾」とは「境目」を意味する。反応閾値とは、**ある反応を起こさせるのに必要な最低の刺激量**のことである。発達した脳をもたない昆虫は、この反応閾値——**外部からの刺激に反応するレベル**——が**個体ごとに異なることで、集団全体で効率的に対応する仕組み**をつくっている。



例えば、アリは巣の中で幼虫が空腹になったことを示す何らかの刺激に反応してエサを取りに出ていくのだが、どれくらいの刺激で反応するかは個体（アリ）によって異なる。敏感に反応するアリは、すぐにエサ取りに出かける。冒頭の、獲物を独り占めしようとしているかに見えたアリは、刺激に強く反応する「先発隊」だったのかもしれない。

そしてアリの一部は、巣が襲われるといった緊急事態にでもならない限り働かない。働かないアリは怠け者ではなく、当面の仕事がないアリで、**集団全体で緊急事態に備えて待機**する役割をもつアリなのである。事実、働かないアリだけを集めると、やがて働く者が現れるのだという。

昨今の地球規模の大競争社会では、**効率があまりに優先され、無駄を極力避けることが強調され過ぎ**ているように思う。「**必要な無駄**」も省いてしまったその結果、一度想定外や非常事態が起きれば既存システムの機能不全が突如として露わとなり、「～崩壊」が見られるようになる、という具合である。

車のハンドルやブレーキには「遊び」というものがある、少々操作しても力は伝わらないようになってきている。操作した分がそのまま伝わると、むしろ危険だからである。**一見不要のように見えるもの、それが存在する意味**が別にあるということである。こうした例は枚挙に暇がない。勉強の途中の休憩も、時に日常を離れる旅も、みな「必要な無駄」である。それは「ゆとり」であり、電灯のつけっぱなしなどの「本当の無駄」と賢く区別する必要がある。「働かない」働きアリに学ぶこと、それは、普段は必要ないが、いざという時の備えを怠らない、何事も余裕が大切だということである。

Prepare for the worst. Preparation is the first step to success.

(最悪に備えよ。備えは成功への第一段階である) ⇒ 「**備えあれば憂いなし。**」